

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成29年度農作物病害虫発生予察情報について

平成29年度農作物病害虫発生予報第13号を発表したので送付します。

平成29年度農作物病害虫発生予報第13号

平成30年2月2日
徳島県

I. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では, 発生圃場率が44.4%, 発病度が2.2と, 平年(13.3%, 0.9)に比べて高い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので, 肥培管理に注意する。
- (2) 多湿環境は発病を著しく助長するので, 施設内が過湿にならないよう十分に換気を行う。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので, できるだけ早く除去し, ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので, 薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。特に, 下葉には丁寧に散布する。
- (5) 低温時期は孢子を形成しやすく, 感染源が多くなるので, 発生を認めたら薬剤散布間隔を短くして, 薬剤散布を行う。
- (6) 薬剤は, ザンプロDMフロアブル, フォリオゴールド, ベトファイター顆粒水和剤, ライメイフロアブル, ランマンフロアブル, リドミル銅水和剤などを散布する。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が2.0%, 発病度が0.02)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので, 施設内が過湿にならないよう換気を図る。悪天候が続く等, 十分な換気ができない場合には, 暖房機のファンを作動させて, ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので, 適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花卉などは伝染源になるので, できるだけ早く除去し, ハウス外で処分する。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.6%、発病度が0.1)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 病斑は主に葉裏に形成されるので、薬液は葉裏にも十分に付着するよう丁寧に散布する。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が55.6%、寄生葉率が2.2%と、平年(34.5%、2.3%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年やや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.9%、発病葉率が1.0%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年より少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が42.9%と、平年(53.7%)並の発生であるが、発病葉率は2.6%と、平年(7.3%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が14.3%と、平年(4.4%)に比べて高いが、発病果率は0.3%と、平年(0.1%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が57.1%と、平年(32.0%)に比べてやや高いが、寄生葉率は0.9%と、平年(1.4%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が4.4%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。ハダニ類はほとんど葉裏に寄生しているので、薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が42.9%と、平年(66.0%)並の発生であるが、寄生葉率は1.7%と、平年(7.0%)に比べて低い。なお、被害果の発生は認めていない(平年同時期は1.3%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が55.6%と、平年(60.3%)並の発生であるが、発病葉率は3.1%と、平年(10.7%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花卉などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が22.2%と、平年(47.6%)に比べてやや低く、発病葉率は0.2%と、平年(8.8%)に比べて低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉裏を重点的に行う。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

褐斑病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が22.2%、発病葉率が1.8%と、平年(50.9%、4.5%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 肥料切れや窒素過多などは発病を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉裏を重点的に行う。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.6%、寄生葉率が0.0%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が4.8%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が23.0%、寄生葉率が1.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

春夏ニンジン

斑点細菌病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が4.6%、発病株率が0.1%)。

(2) 2月1日発表の1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並か少なく、日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いが、期間の前半は気温の低い状態が続き、かなり低い時期もあると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 天候急変等により換気が遅れ、トンネル内の温湿度が急上昇すると蔓延しやすい。

冬レタス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が30.8%と、平年(18.3%)に比べてやや高いが、発病株率は0.8%と、平年(0.7%)並の発生である。

(2) 2月1日発表の1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並か少なく、日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いが、期間の前半は気温の低い状態が続き、かなり低い時期もあると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 過湿にならないようトンネル内の換気や圃場の排水に努める。特に収穫期には株元が繁茂して過湿になり、発生しやすくなるので注意する。

- (2) 発病株は伝染源になるので、できるだけ早く除去する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

菌核病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並), 発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 1月後半の巡回調査では、発生圃場率が76.9%, 発病株率が4.6%と、平年(19.6%, 1.3%)に比べて高い。
- (2) 2月1日発表の1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並か少なく、日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いが、期間の前半は気温の低い状態が続き、かなり低い時期もあると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) トンネル内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病株を放置しておくとも多数の菌核を形成して伝染源になるので、できるだけ早く処分する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ハウレンソウ

べと病

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月前半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が4.2%, 発病度が0.2)
- (2) 2月1日発表の1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並か少なく、日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いが、期間の前半は気温の低い状態が続き、かなり低い時期もあると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 県内では、べと病菌レース13による発病が確認されているので、レース13以上に抵抗性を持つ品種を利用する。作型等の関係で作付けできない場合には、薬剤による防除を徹底する。
- (2) 平均気温が8～18℃で曇雨天が続くと、多発しやすい。発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- (3) 葉が繁茂して軟弱となると被害が多いので、肥培管理に注意する。
- (4) 病原菌は被害株に付着したまま越冬し、春になると分生胞子を形成して伝染する。春先の発生を抑制するために、薬剤を予防的に散布して発生を防止する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月前半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が43.8%, 1株当たり寄生虫数が0.7頭)
- (2) 2月1日発表の1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並か少なく、日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いが、期間の前半は気温の低い状態が続き、かなり低い時期もあると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 3.6%, 発病果率が 0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので, 施設内が過湿にならないように換気を図る。

(2) 発病果は伝染源になるので, 速やかに圃場から持ち出し処分する。

(3) 耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年やや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 6.4%, 発病葉率が 0.2%, 発病果率が 0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 古葉を早めに除去し, 葉裏にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(3) 罹病した果実や茎葉などは圃場外に持ち出し, 病原菌密度の低下に努める。

(4) 耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では, 発生圃場率が28.6%, 寄生株率が 4.0%と, 平年(24.3%, 3.4%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので, 薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並~やや多く(前年並), 発生程度は「中」

2) 予報の根拠

(1) 1月後半の巡回調査では, 発生圃場率が50.0%と, 平年(62.4%)並の発生であるが, 寄生葉率は13.1%と, 平年(8.3%)に比べてやや高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので, 薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

II. その他

1. 朝夕の冷え込みが厳しくなる時期なので, 施設内の換気は, 内部温度が急激に下がらないよう適切に行い, 夕方は早めに閉め込む。また, 暖房機の点検を励行し, 作目に応じた適正な温度管理を行う。
2. 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し, 周辺作物等へ飛散しないよう注意する。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所

URL : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/t-boujoshou/>

- 病害虫の発生予察情報, 発生状況, 防除法等をお知らせしています。